

雜纂

日本海沿岸石器時代遺跡の

地理學的考察 (下)

文學士 小 牧 實 繁

潟西村角間崎遺跡は、男鹿街道に沿ふ北微東南
微西の一線を以て八郎潟西岸の沖積地と劃せられ

此れより一段高き洪積層臺地を切り角間崎より西
北鮪川に通ずる北浦街道が牛込の聚落を過ぎ高度
約三十米許登つた臺地上に位し、南方は稍々急な
る斜面を以て、該臺地を西北西の方向に喰込んで
居る水田面に臨んで居る。其の地質は、下部は稍
々堅緻なる青灰色粘土、上部は多少腐植土を混す
る黒褐色の均粒砂である。道路は南西水田面に斜
下する洪積層臺地斜面を縫つて北西に進むのであ

るが、遺物は此の道路の北側より發見せられる。
第九圖は南方より該遺跡を望める所である。

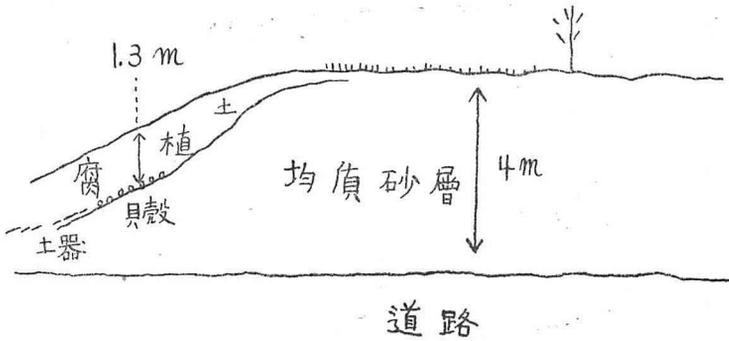
余は該地點に於いて佐藤小太郎、大淵金城兩氏
等の援助を得て小發掘を企て案外多數の遺物を獲
た。先づ遺物出土の状態を概述せんに、遺物は凡
て前述黒褐色砂層と青灰色粘土層との接觸面（其
の間整合なりや不整合なりやは此の地點のみに於
いては不明なるも恐らく不整合か）即ち粘土層の
表面及び粘土層中の最上部より出土し、砂層中よ
りは殆んど發見せられないのである。遺物の個々

に就いては後に記す。

本遺跡より南六十度東に當り、牛込より鮎川に



第九圖



第十圖

通する北浦街道北東側に開鑿せられた新道（大正四年二月二十八

日發行の五萬分

一地形圖には未

記入）の切通し

西南側斷面に又

遺物の露頭を見

る事が出来る。

其の地點は前述

の遺物包含地よ

り臺地を隔てて

南東の裏側に當

り、其の直線的

距離は僅々半町

位であるから、

兩遺物包含地は

實際は連続したものかと思はれる。地質は褐色の

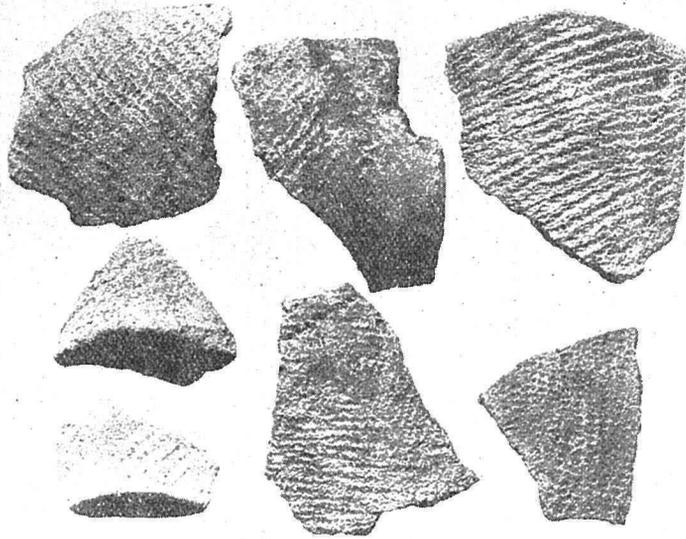
均粒砂層より成り、其の上部は薄き腐植土層に被はれ、其の上に雜草又は松の木等が茂つて居る。而して該砂層は此の地點に於いて南東方に斜下する傾斜地をなし、其の一端凹部には厚さ一・三米の腐植土が乗り、(明かに不整合に)而して新道も又該斜面に沿ひ南東に下つて居る。本遺物包含地の斷面は道路の切通し面が明瞭に示して居るので第十圖に示す事とした。

該地點(便宜上第二號地と呼ぶ)の遺物は上記地點(第一號地と呼ぶ)のものと全然同形式のものであるが、其の出土状態より云へば、凡て均粒砂層と其の上部にのる腐植土層との不整合面より發見せられ、蛻貝層は該不整合面に沿ひ南西に延びて居る。

茲に兩地點發見遺物の叙述を試みるに先だち一應兩地點の層序的相關を考へて見る必要がある。若し兩遺物包含層が著しく時代を異にするものな

らば茲に幾多の問題を惹起するからである。

第一號地の粘土層と第二號地の均粒砂層とは所謂洪積層に屬するものであらう。兩層の中何れが上部、何れが下部であるかは、兩者の直接相接する斷面を見る事が出来ず又兩層の走向傾斜を測定し得る個所が此の附近に發見せられないので、之れを明瞭にする事が出来ないが、兎に角、石器時代に於いては、第一號地に於いては粘土層、第二號地に於いては砂層が地表に現はれて居たのであつて、第二號地には自然的又は人工的に(即ち石器時代住民によつて)一の凹地が作られて居たものと考へられる。此の面が石器時代に於ける地表面であつて、此の面に石器土器貝殻等が遺棄せられたのである。第一號地に於いて遺物が粘土層上及び同表部中に發見せられ、第二號地に於いて砂層上に發見せられるのは此れが爲めである。而して第一號地粘土層上の腐植土質砂層及び第二號地



第十圖

砂層上の腐植土質砂層（腐植土の含有量が第一號地腐植土質砂層中に於けるより大なるは一には此の地點が凹地であつて腐植土質の流失が少かつた爲と解せられる）は石器時代以後、當時の遺物が遺棄せられた上に堆積せられたものである（第二號地に於いては臺地表面の腐植土が該凹地に流れ込んだ量も相當多かつたであらう）。遺物が此等の層中に發見せられないのは其の爲である。

層序的相關は大體右の如しとして、兩地點出土の遺物は如何なるものであるかと云ふに、佐藤小太郎大淵金城兩氏其の他の援助によつて兩地點より發掘の遺物は土器、石器、貝殻が主なるものであつた。土器は厚手派式、席紋を有する壺の口縁、腹部、底部等で、其の一部分は第十一圖に示す如くである。石器は斜長石石英粗面岩（Plagioclite）、硅質頁岩、凝灰岩質頁岩の扁平なる、楕圓形及び卵形礫の相對する兩端を打缺き作つた錘

石四個(第五圖三、六參照)、青灰色、褐色、セビヤ色
玻璃質石英粗面岩打製石槍、セビヤ色同石製大形
石鏃、同色同石製二等邊長三角形石鏃、同色同石
製柳葉式石鏃、灰、褐、セビヤ斑色同石製石七、
黑色同石製石七、セビヤ色同石製石七、セビヤ色
同石製環狀石器破片、セビヤ色同石製石槍若しく
は石七破片(第十二圖)、その他玻璃質石英粗面岩原
石、黑曜石原石、黑色石英粗面岩破片及び角閃輝
石安山岩の扁平なる長楕圓石(何等かの用に使用
せる事明かと思ふ)等であつた。貝殻は蜆貝の一
種のみで、此は今も多く八郎潟に産し、佐藤氏に
よれば一升高くて十錢内外を以て賣買せられると
の事である。

以上の遺物中には、遺物其れ自身に於いて吾人
の興味を牽く環狀石器の如きもあるが、個々の遺
物そのものに就いては今は以上の叙述に止め、以
下本遺跡に對する地理學的考察を試むるに、遺物

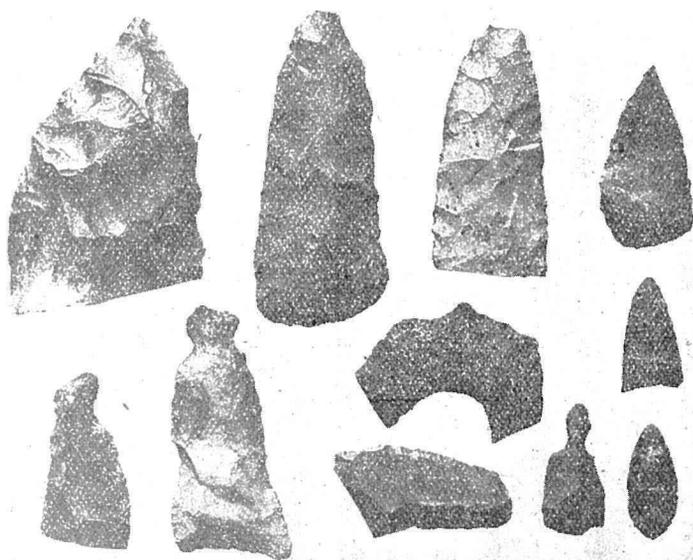


圖 二 十 第

全體を通覽して本遺跡の特徴と思はるるものは、何と云つても鍾石及び蜆貝出土の事實である。即ち鍾石も蜆貝も第一號第二號兩地點に共通に存し以て本遺跡の特徴をなすのであるが、此の事實も又、金塚村貝塚に於けると同様、地理的に見て甚だ興味ある事實である。即ち金塚村貝塚の場合の説明により明かなる如く、石器時代縹紋土器使用の時代に於いて、八郎潟が既に外海でなく半鹹半淡の水面であつた事を示す。換言すれば八郎潟を中心とする所謂トンボロ式地形が既に大體此の時代に於いて形成せられて居た事を示すのである。

武藤一郎氏は、本遺跡に於いて大部分は蜆の間に、少量のアサリ、蛤、カキの混入を見た、と云つて居られるが、貝類學者の致ふる所によれば、此等の貝類は蜆と同じく半淡半鹹の潟中に棲息し得るのであるから、此等貝類の混入は決して、八郎潟が當時既に半鹹半淡の水面であつたこの事實

と矛盾するものではない。(武藤氏は八郎潟は石器時代に於いて既に湖沼に變じて居つたと推定し得と考へられたが、其の考へは少し進み過ぎて居る様である。又少量のアサリ、蛤、カキを鹽水産と考へ、此等は一里乃至一里半の距離にある脇本、五里合村等の海濱より獲たものと考へられたが、その考へも少し不自然である。實際石器時代の住民は一里乃至一里半位の距離は大して遠しとせず此等の貝を脇本五里合村等の海濱より獲たかも知れず、又交通により物々交換其の他何等かの手段を以て海濱住民より獲たかも知れないが、蜆貝を獲たと餘り隔たらない潟中で得たと考へる方が更に自然である。斯く考へても八郎潟が當時既に半淡半鹹の水面であつたこの考へと矛盾する事はない)

兎も角本遺跡より現に蜆貝を出土する事實は石器時代本遺跡附近に既に半淡半鹹の潟或は入江の

存した事實を示し、而してかかる水面は、該地方の地史殊に石器時代の地史を考へて、八郎潟の前身以外ではあり得ないのであるから、八郎潟は、石器時代に於いて既に外海ではなく半淡半鹹の水面となつて居た事が明かとなる。然らば當時既に天王村船越町の砂丘及び潟西村より山本郡濱口村に列る一帯の砂丘地に當り、此れが基盤前身をなす砂堤若しくは砂洲が生成して居り、(其の上に砂丘が生成して居たか否かは追て後日考究する事とする)所謂複トンボロ式地形を形成して本土と男鹿島との間に八郎潟前身たる半淡半鹹の水面を擁して居た事を知り得るのである。本遺跡發見の鍾石及び貝殻は此の水面と密不接觸の關係にあるものである。

以上説述する所によつて、八郎潟西北及び西南一帯の砂丘地の生成が案外古く、既に石器時代繩紋土器使用の時代に於いて大體今日見る如き地形

が形成せられて居たであらう、少くとも砂丘の基盤をなす砂洲は形成せられて居た、と云ふ事が明かとなつたと思ふが、此の事實は越後金塚村近の海岸に於ける事實と共に、他の砂丘地方の研究に當り、其の生成年代考察上一の比較的確かなる参考材料を供するものである。假令、砂丘地の案外古きものなる事が因幡濱坂、丹後函石、加賀内灘等石器時代遺跡に於いて既に周知の事實であつたにしても、本遺跡の示す事實は、上記諸地方に於いて砂丘其のものに存する石器時代遺物が砂丘生成の年代を知らしむるとは趣を異にして、別方面より、同じく砂丘生成の年代考察に一の暗示を與ふるものである。

繩紋土器使用時代は彌生式土器使用時代より比較的古いのであるから、本遺跡の場合に就いても越後金塚村遺跡の場合に於けると同様、第四紀新層に屬する砂洲地の生成は案外に古く繩紋土器使

用時代以前に溯る事となる日本海沿岸砂丘、自身の上彌生式土器及び少數の繩紋土器を伴ふ石器類を發見する事は既に周知の事實であり之れに因つて日本海沿岸砂丘の生成が案外古き時代に屬する事を考へ得るのであるが其の考へを更に裏書して砂洲が純粹の繩紋土器使用時代以前の生成に係る事を本遺跡の研究が明かにする、と云ふ事が出来る。

但一面に於いて羽後に偏在する本遺跡出土の繩紋土器及び石器類は、(越後金塚の其れに就いても同様であるかも知れぬ) 因幡濱坂、丹後函石、加賀内灘砂丘發見の彌生式土器及び之れに伴ふ石器類に比し、其の實年代に於いて略同時代のもの若しくは却つて新らしいものであるかも知れぬ、即ち地方的文化の差異若しくは民族的文化の差異によつて、上述諸地方に於いて彌生式土器及び石器類が盛行した時若しくは其の使用が既に頽れた以

後、本遺跡に於いて(越後金塚に於いても或は)繩紋土器及び石器類が使用せられて居たかも知れぬから、右の説は絶對的確實性を有する譯ではなく、因幡濱坂、丹後函石、加賀内灘砂丘上に純粹の繩紋土器遺跡絶對になく(有れば砂丘の生成年代は更に溯り得る事となる)、而して其の附近に於いて砂丘地より古き土地の彌生式遺物包含層より下層に、該砂丘の背後に生せる潟若しくは内灣等半鹹半淡の水面と關係ある(即ち峴貝殻等を出す如き)純繩紋土器遺跡(例へば越後金塚、羽後角間崎遺跡の如き)の發見せらるる反面、金塚又は角間崎遺跡に於いて既に發見の繩紋土器包含層より更に上部の層序中に彌生式遺物を發見し而して砂丘上に繩紋土器遺跡の存せざる場合に於いて初めて確實に主張し得るのみであるから、此の説は絶對的確實性を有すと云ひ得ないとするも、從來因幡濱坂、丹後函石、加賀内灘等の石器時代遺跡の存在

によつて案外古き時代の生成にかかるを知り得た砂丘の生成年代に對し、本遺跡の示す事實は、越後金塚の遺跡のそれと共に、別方面より同じく多少の暗示を與へるものであるとは云ひ得る。

若し其れ本遺跡の地理的考察により稍々明かとなつた石器時代に於ける舊八郎潟の水面範圍、排

西洋に於ける東洋の影響

(特に中古期に於ける) (中)

Der Einfluss des Morgenlands auf das Abendland.
(Vornehmlich während des Mittelalters)

ゲオルク・ヤコブ 著
文學士 宮崎市定抄譯

更に目を經濟藝術文學の方面に向けんか、此にも亦、古典教育はその光輝を失はざるべからざるなり。

バビロニアは吾人の經濟生活に大影響を持ち、當時の金の銀に對する比價の方則は、つい最近の

水口、鹹度、生物其の他一般の地理的條件が當時如何なる状態に存したか、又此れと當時の住民との相互關係は如何なりしか等の問題に就いては更に稿を改めて説述する事となし、今は此の程度の叙説を以て擱筆する。(一九二六・一・二九)

銀の大暴落に至るまで行はれ來れり。この方則とは、金と銀とに應ずる屋乃ち月と日との運行時間二七と三六〇との比例をなすといふにあり。十九世紀になりても、この方則に少しにても違ふ時は忽ち大恐慌を來すなりき。最近吾人の經濟生活を根